

# なごや街角今昔

## 【8】今池…路面電車がたった街

池田 誠一

### 1 名古屋東部の開発

昔の名古屋の街は南北に長い形をしていました。その東は小さな谷を挟んで台地があり、点々と村が散在する農村地帯でした。明治24年の地図でも城下を外れると田畑が続いているのが分かります。(図1)

この、都市的には未開発の地域に、最初に白羽の矢が立ったのは中央線の千種駅でした。明治33年、広小路通を東に延長した所に駅が設けられ、幹線道路や路面電車も計画されま

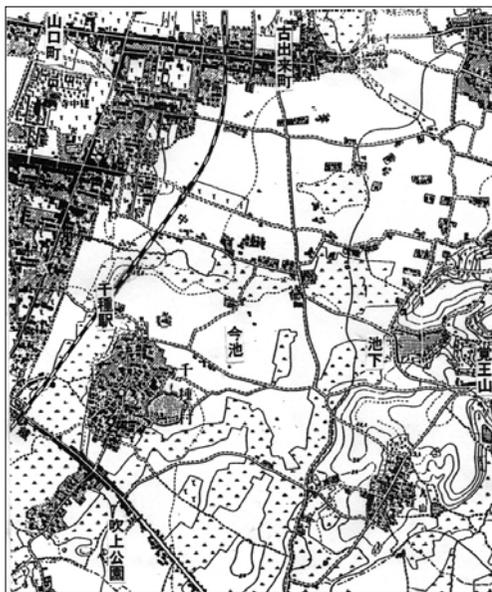


図1 明治24年頃の城下の東部(黒は田、白は畑)

した。当時は小さな千種村でしたが、将来は西の名古屋駅に対する「東の名古屋駅」とさえ期待されていたようです。(第3回参照)

ところがそれから百年余経った現在の街を見ると、千種駅に変わって地域の核になっているのは、当時一面の田畑だった今池のように見えます。明治の後半から今日にかけて、その田畑に何が起こったのでしょうか。今池の街角に立ってその経緯を追ってみたいと思います。

### 2 今池の歴史

#### (1) 明治時代までの今池付近

明治の初め頃までの今池は、北に少し離れて信州につながる高針街道が、東にこれも少し離れて星崎で取れた塩を北に運んだ塩付街道が通っていました。また西南500<sup>歩</sup>位の所に今池(馬池)という池があり、その横を城下の南と高針街道とを結ぶ馬道と呼ばれる道が東西に通っていました。地名にもなった今池は、最初は馬池でしたが、「ンマ」発音が変わって今池になったといえます。この付近で宿場の伝馬が飼われ、水浴びさせていたことから馬池と呼ばれたようです。今池交差点付近は当時は今池新田の中で、その北には城下の東郊に散在していた名古屋新田がありました。(図2)

#### (2) 明治末からの大変化

明治の末から大正の初めにかけて、この地



図2 名古屋新田の分布(新修名古屋市史③)

商店街の仲田が出来上がったのだといえます。

### (3) その後の今池

大正13年に初めてできた名古屋の都市計画で、今池を南北に通る道路は幅員33<sup>メートル</sup>の幹線道路になりました。名古屋の環状ルートを形成し、市東部を南北に走る最も重要な道路になったのです。

日中戦争が始まる頃になると、機器製作所はフル操業になりました。その従業員はなんと2交替で5万人にもなったといえます。仲田は東部一の繁華街といわれるようになりました。ところが戦争で軍の施設はことごとく破壊されました。戦後の仲田は火の消えたような街になってしまったのです。

しかし一方で、今池は南北の幹線道路が整備され始め、交通結節点として機能をさらに高めました。市電で、北の矢田方面、東の東山方面、南の八事方面などからの客が集まる場所になったのです。そしてパチンコや映画館などの娯楽施設が出来始めました。そこに昭和35年、地下鉄1号線の今池駅が出来、今池は東部を代表する繁華街になったといえます。

域に大きな出来事が重なって起こりました。

まず明治37年、今池の東1<sup>キロ</sup>程の月見坂に釈迦の真骨をまつた覚王山日暹寺(今は日泰寺)が出来た事です。我が国唯一ということもあって多くの参詣者が訪れました。この客を見込んで覚王山電軌という会社が千種駅の北から今池を通り月見坂(今の覚王山)までの電車を企画し、44年に開通させました。翌年には中央線を越え栄町線と直通しました。

一方明治40年頃から飯田街道で馬車鉄道を運行していた会社が電化のためにルートを変え、45年には千早から大久手を経て八事まで運行を始めました。併せて大久手から今池を結ぶ支線を開通させたのです。今池は、東西は名古屋駅から覚王山まで、南は八事までの電車の交差点になりました。なにもない田畑の地域が、いきなり名古屋東部の交通拠点になってしまったのです。

もう一つの変化は、明治35年頃から東北に少し離れて陸軍が大きな兵器廠を造り始めたことです。中央線からの引込み線も出来ました。続いて大正5年から、今度はその南に機器(兵器)製作所をつくり始めたのです。前者は保管が中心で従業員も多くなかったようですが、後者はまさに労働集約型で多くの従業員がいました。この人たちが通勤に仲田の電停まで仲田本通を歩いたため、通りには両側に商店が張り付き、仲田は次第に賑やかな街になっていきました。こうして交通拠点の今池と

## 3 変遷の跡を追って

それでは今池付近の変遷を追って街を歩いてみましょう。(図3) JR、地下鉄の千種駅からにします。駅前広場を出て右の広小路通を渡り、東の一本目を右に曲がると高牟神社があります。千種村は江戸時代には古井村といいました。この社の中の井戸が名の起こりといえます。神社を出て南に行くと、突き当たるので西の道に入ります。この道は郡道(郡道千種街道)と呼ばれる街道の北の端になります。

しばらく行くと左手に鬼饅頭を売る店があります。その前を左右に通る細い道が昔の馬道です。左に曲がって広い通を過ぎ、一本目を左に入ると今池中学に突き当たります。ここは昔の馬池の端になり、前の中学校は池でした。左角に背の高い今池地蔵があります。明治の末に子供が溺れて亡くなった供養に建てられました。

1本東行ってから、南に大久手に行ってみます。しばらく行って突き当たった道が昔

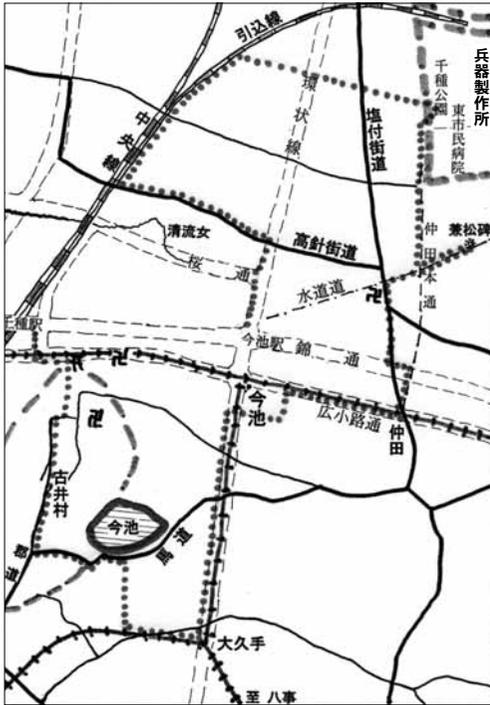


図3 明治末の今池付近と現在(破線)。(…はルート)  
千早からの軌道が走っていた道で、左に行くと大久手の5差路に出ます。軌道は手前から右向こうの道を八事に向かっていた。こ



今池の交差点。北から南をみる

こから北に今池まで支線が敷かれたことが、今池を飯田街道方面と結び付ける要因になりました。この線路の道が拡幅されて33メートル幅の道路になったのです。

その環状線を北に進みます。しばらく行くと今池の繁華街の中に入ります。今池は映画、パチンコなどの大衆娯楽の街です。演劇も残っています。今池の交差点の1つ手前の信号位が繁華街の中心でしょうか。道路を渡って東の裏道に入ってみます。大手スーパーの通で、左右には飲食の店などが並んでいます。2本目を左に行くと覚王山通(広小路通)に出て、東に少しで仲田の交差点です。

仲田を北に行く仲田本通は戦前大変賑わった道ですが、今はその面影はありません。北に少し行くと地下鉄の走っている錦通です。渡って左1本目の道は、すぐの所で少し曲がっています。この曲がった所から先が、南から宅地の中を進んできた塩付街道になります。少し行くと公園の西側に大昌寺があります。

この辺りは名古屋新田でした。江戸時代の初め兼松(源蔵)家と小塚(源兵衛)家の先祖が中心になって開発した新田です。1箇所ではなく千種区や瑞穂区等に分散して

300戸に及びました。後になって南北に分け、北は兼松家が庄屋(新田頭)になって現地に住み、拠点にしたのがこの付近でした。大昌寺は元は兼松家の私庵で、住んだ所は100メートル程北の右側、高針街道と塩付街道の一緒になる所でした。大昌寺は横に33観音の石仏があります。

寺の向こう側は水道道です。大正3年に出来た覚王山水道塔から名古屋市内への上水の



今池地蔵。  
今も池を見つめているように



今池の裏道。  
今池はブロードウェイを目指しているが



大久手交差点から北に今池を望む。環状線を



仲田交差点から仲田本通を見る

供給ルートで、地上は緑道に開放されています。その水道道を東に、仲田本通を過ぎて少し行った左側に小さな林があります。中に塚が築かれて、祠と石碑があるのが見えます。江戸中期、生産力の落ちてきた新田に対して、いくつかの灌漑池を造り、用水路等を整備した兼松正受の功績を記念する碑で、1819年に建てられています。

仲田本通まで戻り北に進むと東市民病院があります。ここから北1\*、東600\*程が陸軍の用地でした。北に行った公園の入口から少し入った所に、ここで亡くなった人の慰霊碑と爆撃で穴の開いたコンクリート塀があります。

公園入口の1本北の道を西に、広い都通を越えて3本ほど行くと右から左に斜めに抜ける細い道があります。兵器支廠への引込み線の跡で、その線に沿って西に行くと中央線の側道です。40年ほど前までは線路は地上でした。線路に沿って南に進み、2つ目の信号から2本目の道を東に曲がります。この道が高針街道です。少し行った右には小川が流れ、1920年まで清流女学校があったといいますが、今はJRの研修施設になっています。少し行くと都通に出て、右に行けば地下鉄の今池駅です。少し先の今池交差点東南角には馬池の馬が颯爽と遊んでいます。



住宅地の中を歩く塩付街道。  
左は大昌寺



林の中にひっそりと残る  
兼松正受遺愛碑



今池交差点東南角の馬の群れ

#### 4 地域間の競争

名古屋の東部の街を地域間の競争としてみてみましょう。広小路通の東には大正時代、千種駅前、今池、仲田、池下、月見丘(覚王山)と電停が並んでいました。この中で千種駅は、中央線の駅が出来てトップに立ちましたが、合併問題がこじれ明治末まで何も変化がありませんでした。(第3回参照)仲田は、戦前は陸軍の工場従業者で大変栄え、東部一の繁華街といわれました。しかし戦争の後需要がなくなってしまいました。池下と覚王山は地形的に丘陵地を控え、南北の交通路もありませんでした。

ところが今池は家屋もなく平坦な所であったが故に、東西南北に電車や道路が通りました。そして、それが戦後花開くことになったのです。たまたま飯田街道を走った馬車鉄道が、電化するために新ルートに迂回して大久手の曲がり角ができました。その角から北に延びた支線が、今日の街角に大きな意味を持つことになったといえそうです。

〈主な参考文献〉

- ①小林元「千種村物語」(1984、自費)
- ②千種区婦人郷土史研究会「千種区の歴史」(1981、郷土史刊行会)
- ③名古屋鉄道広報宣伝部「名古屋鉄道百年史」(1990、名古屋鉄道)